

平成18年 8月2日	農作物病害虫発生予報 8月	山口県病害虫防除所 山口県農業試験場
---------------	--------------------------------	-----------------------

～目 次～

I	予報の概要	1
II	予報	
	【主要病害虫】	2
	【その他の病害虫】	11
III	病害虫・農薬情報	
	病害虫メモ — トビイロウンカの生態と防除	12
IV	参考(予報の見方、気象予報、8月のテレホンサービスの内容)	13

I 予報の概要

農作物名	病害虫名	予想発生量	現 況	
			平年比	前年比
イネ	いもち病 (穂いもち)	やや少	—	—
	紋枯病	平年並	少	少
	もみ枯細菌病	平年並	—	—
	セジロウンカ	やや多	やや多	少
	トビイロウンカ	やや多	やや多	前年並
	コブノメイガ	平年並	平年並	少
	斑点米カメムシ	やや多	やや多	少
カンキツ	かいよう病	やや多	やや多	前年並
	黒点病	やや少	やや少	少
	ミカンハダニ	やや多	やや多	多
ナシ	黒斑病	やや多	やや多	前年並
果樹全般	カメムシ類	やや多	やや多	多

作物	担当者	
普通作	野崎 (病害)	中川浩二 (虫害)
果 樹	藤村 (病害)	殿河内 (虫害)
野 菜	岡田 (病害)	岩本 (虫害)
茶	中川浩二 (病害虫)	

お問い合わせ先	
TEL	(083) 927-4006
FAX	(083) 927-4071

II 予報

【主要病害虫】

イ ネ

1 いもち病（穂いもち）

(1) 予報内容

予想発生量	防除時期
やや少	粉剤：穂ばらみ後期と穂揃期の2回

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬の巡回調査では、葉いもちの発生ほ場率は18.6%（平年45.7%）、発病株率は5.0%（平年20.9%）で平年に比べやや少なかった（-）。

イ 気象予報では8月の降水量は平年並み、日照時間は平年並みか多い（-～±）。

(3) 防除対策

<耕種的防除>

窒素肥料の多用は避ける。

2 紋枯病

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	少	少	粉剤：穂ばらみ中期（出穂14日前頃）

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は9.3%（平年20.5%）、発病株率は1.3%（平年3.0%）で平年に比べ少なかった（-）。

イ 気象予報では、8月の気温は平年並みか高い（+）。

(3) 防除対策

<耕種的防除>

窒素肥料の多用は避ける。

<防除判断>

防除の目安は、防除適期の穂ばらみ中期（出穂14日前頃）に発病株率が15～20%以上である。

<防除のポイント>

薬剤散布は、出穂期を過ぎると効果が劣るので、適期防除に努めるとともに株元まで十分に薬剤がかかるよう丁寧に行う。

3 もみ枯細菌病

(1) 予報内容

予想発生量	防除時期
平年並	粉剤：出穂始め～出穂期 粒剤：出穂3～4週間前

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬の共同育苗施設（33施設）における調査では、育苗期の苗腐敗症の発生施設率は2.9%（前年6.1%）で前年並みであった（±）。

イ 気象予報では、8月の気温は平年並みか高く、降水量は平年並みである（+）。

(3) 防除対策

<耕種的防除>

窒素肥料の多用は避ける。

<防除判断>

出穂期を中心に前後3～4日が高温（特に最低気温が22～23℃以上）で降雨頻度が高い場合に多発生しやすい。

<防除のポイント>

薬剤は発生前に予防散布しなければ効果が劣る。

4 セジロウンカ

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	やや多	少	8月5～9日頃（幼虫最盛期） 防除適期予測図参照 （主要な飛来は6月26～27日、7月18日頃と考えられる。）

(2) 予報の根拠

ア 予察灯における誘殺数（5か所、5月11日～7月25日）は、990頭（平年4,848頭）で平年に比べやや少なかった（-）。

イ 7月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は91.9%（平年72.7%）、10株当たり虫数は72.1頭（平年33.0頭）で平年に比べやや多かった（+）。

(3) 防除対策

<防除判断>

ア 褐変穂を生じる恐れがあるので、穂ばらみ中期までに株当たり50頭以上（成幼虫）の発生があれば薬剤防除を行う。なお、5月中旬以前に移植した作型で長期持続型箱施用剤を使用しているほ場は、薬効が切れている場合があるので特に注意する。

イ 既に出穂したほ場では、防除の必要性は低い。

<防除のポイント>

ア 飛来時期が複数あるため、散布後は必ず効果を確認し、必要に応じて追加防除を行う。

イ 薬剤は株元によくかかるよう丁寧に散布する。

山口県農林業情報システム

飛来日	8月					9月					
	1	5	10	15	20	1	5	10	15	20	25
セジロウンカ											
△ 6月10日	o	AAAAAA	---	o	ooooo	@	o	oooo	AAAAAAA	---	o
☆○ 6月26日	---	ooooo	@	@	o	o	o	o	AAAAAA	---	o
☆○ 6月27日	---	ooooo	@	@	o	o	o	o	AAAAAA	---	o
○ 6月30日	---	ooooo	@	@	o	o	o	o	AAAAAA	---	o
○ 7月4日	AAA	---	o	o	o	@	@	o	o	o	o
○ 7月7日	AAAAA	---	o	o	o	@	@	o	o	o	o
☆○ 7月18日	o	o	o	o	o	o	o	o	o	o	o

調査月日 2006年 7月 31日
 凡例 A: 成虫 - : 卵 o: 幼虫 @: 防除適期
 ☆ 主要な飛来 ◎ 多飛来 ○ 並飛来 △ 少飛来

図 セジロウンカの防除適期予測図

5 トビイロウンカ

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	やや多	前年並	8月1～14日(7月9日、18日飛来波幼虫最盛期) 8月23～30日(6月30日、7月3日飛来波幼虫最盛期) 防除適期予測図参照 (飛来日は、6月30日、7月3日、9日、18日頃と推測され、主要な飛来波はなかった。)

(2) 予報の根拠

ア 予察灯での誘殺数(5か所、5月11日～7月25日)は、19頭(平年28.5頭)で平年並みであった(±)。

イ 7月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は14.0%(平年8.4%)、10株当たり虫数は0.15頭(平年0.24頭)で平年に比べやや多かった。特に、長門中間、北浦、長門山間を中心に発生が認められた(+)

(3) 防除対策

<防除判断>

ア 幼虫最盛期に当たる8月1日～14日、8月23～30日頃に必ず発生密度を確認する。

イ 防除の目安は、8月上旬までは成幼虫20頭/100株以上、8月中旬～9月上旬は成幼虫5頭/株以上である。

ウ 8月17日頃に長期予報を発表するので参照する。

<防除のポイント>

ア 飛来時期が複数あるため、散布後は必ず効果を確認し、必要に応じて追加防除を行う。

イ 薬剤は株元によくかかるように丁寧に散布する。

山口県農林業情報システム

飛来日	8月						9月					
	1	5	10	15	20	25	1	5	10	15	20	25
トビイロウンカ												
○ 6月30日	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
○ 7月3日	o	o	o	o	o	o	o	o	o	o	o	o
○ 7月9日	@	@	@	@	@	@	@	@	@	@	@	@
○ 7月18日	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

調査月日 2006年 7月 31日
 凡例 A: 成虫 - : 卵 o: 幼虫 @: 防除適期
 ☆ 主要な飛来 ◎ 多飛来 ○ 並飛来 △ 少飛来

図 トビイロウンカの防除適期予測図

6 コブノメイガ

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	少	粉剤・液剤: 8月5～14日頃(若令幼虫最盛期) 防除適期予測図参照 (飛来日は、6月27日、7月4日、23日頃と推測され、主要な飛来波はなかった。)

(2) 予報の根拠

- ア 初確認は、7月4日(平年6月23日)で、平年に比べ遅かった(ー)。
- イ 山口市のマレーズトラップでの誘殺数(7月1～30日)は7頭(平年81.5頭)で、平年に比べやや少なかった(ー)。
- ウ 7月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は64.0%(平年55.0%)、被害葉率は0.8%(平年0.8%)で平年並みであった(±)。
- エ 気象予報では、8月の気温は平年並みか高く、降水量は平年並みである(±～+)。

(3) 防除対策

<耕種的防除>

葉色の濃いイネに好んで飛来する傾向があるため、多肥を避ける。

<防除判断>

- ア 8月6日頃及び8月25日頃に成虫の払い出し調査を実施し、5頭/m²以上であれば粉剤・液剤は7日後に、粒剤は直ちに防除を実施する。
- イ 既に出穂したほ場では、防除の必要性は低い。
- ウ 出穂期に上位3葉の被害葉率が約25%を越えると5%以上減収するとされる。

<防除のポイント>

飛来時期が複数あるため、散布後は必ず効果を確認し、必要に応じて追加防除を行う。

飛来日	8月						9月					
	1	5	10	15	20	25	1	5	10	15	20	25
コブノメイガ												
△ 6月27日	A	-	-	@	@	@	o	o	o	o	o	o
△ 7月4日	+	+	+	+	A	A	-	-	-	@	@	@
△ 7月23日	@	o	o	o	o	o	o	o	o	o	o	o

調査月日 2006年 7月 31日
 凡例 A: 成虫 -: 卵 o: 幼虫 +: 蛹 @: 防除適期
 ☆ 主要な飛来 ◎ 多飛来 ○ 並飛来 △ 少飛来

図 コブノメイガの防除適期予測図

7 斑点米カメムシ類

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	やや多	少	出穂後発生を確認したら防除を実施する。穂揃期と穂揃期7日後の2回防除を基本とする(粉剤・液剤の場合)。

(2) 予報の根拠

- ア 7月下旬の雑草地等における20回すくい取り調査では、84.7頭(平年56.3頭)で平年並みであった(±)(表参照)。
- イ 予察灯での誘殺数(5か所、6月1半旬~7月5半旬)は、アカスジカスミカメは780頭(平年265.1頭)、クモヘリカメムシは4頭(平年11.7頭)でアカスジカスミカメを中心に平年に比べやや多かった(+)
- ウ 気象予報では、8月の気温は平年並か高く、降水量は平年並みである(±)。

(3) 防除対策

<耕種的防除>

出穂2週間前までに畦畔等の草刈りを実施し、それ以後もエノコログサ、メヒシバ、ヒエ等のイネ科雑草の穂が出ないように草刈り等を行う。

<防除のポイント>

- ア アカスジカスミカメ等小型のカメムシ類の発生が多いほ場では、粒剤防除も有効である。防除適期は出穂期~穂揃期であり防除が遅れないようにする。
- イ 8月上旬までに出穂する水稻ではカメムシ類が集まりやすいため穂揃期と穂揃期後7日の2回防除を徹底する。また、薬剤を2回散布した7~10日後に、ほ場でカメムシの発生(特にクモヘリカメムシ等大型のカメムシ類)が見られる場合は直ちに追加防除を実施する。
- ウ 本年は梅雨時期が長引いたためイネ科雑草(エノコログサ、ヒエ、メヒシバ等)の穂にカメムシ類が留まっている可能性が高く、出穂したほ場への移動が遅くなることが考えられる。このことから、8月中旬以降に出穂するほ場でも注意が必要である。

エ 畦畔や休耕田に出穂したイネ科雑草（エノコログサ、ヒエ、メヒシバ等）がある場合は本田と同時に防除を行う。

オ カメムシ類は広範囲で移動するので、地域で一斉防除を行うと効果が高い。

表 巡回調査における雑草地等の20回すくい取り調査結果（単位：頭）

種 類	アサギカシカメ	クモリカメシ	ホソリカメシ	合計(その他含む)
平成18年	55.4	18.2	7.0	84.7
平 年	25.2	16.0	6.9	56.3

カンキツ

1 かいよう病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	やや多	前年並	台風の襲来前

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は45.5%（平年19.6%）、発病果率は6.3%（平年2.9%）で平年に比べやや多かった（+）。

イ 温州みかん等かいよう病に比較的強い品種でも多発している園が認められる（+）。

ウ 気象予報では8月の降水量は平年並みである（±）。

(3) 防除対策

<防除判断>

すでに発病しているほ場やあまなつ、いよかん等発病しやすい品種では、台風の襲来前に防除を実施する。

<防除のポイント>

ア 発病した枝や葉は伝染源となるので、できるだけ除去する。

イ 温州みかんなどかいよう病に比較的強い品種でも多発することがある。特に発病しやすい品種との混植園や近くに発生園がある場合は発生状況に注意する

ウ 防風樹や防風網を適正に管理し、枝葉や果実に傷が付くのを防ぐ。

エ コサイドDFやZボルドーなどの無機銅水和剤を散布する場合は、薬害を防ぐため炭酸カルシウム水和剤（クレフノン）200倍を加用する。なお、ICボルドー66Dを高温期に使用すると薬害を生じやすいので、9月までの使用は避ける。

オ ミカンハモグリガ（エカキムシ）の被害は本病の発生を助長するので、防除を徹底する。とくに隔年交互結実園の遊休樹や幼木では注意する。

2 黒点病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや少	やや少	少	前回の防除後、累積降水量が200～250mmに達したとき、または薬剤散布後1か月を経過したとき

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は90.9%（平年95.9%）、発病果率は42.3%（平年49.3%）で平年に比べやや少なかった（－）。

イ 気象予報では8月の降水量は平年並みである（±）。

(3) 防除対策

<防除判断>

予防散布が基本であるので、(1)予報内容の「防除時期」により防除を実施する。

<防除のポイント>

樹冠内の枯れ枝や放置された剪定枝は本病の伝染源となるので、園外に持ち出して処分する。

3 ミカンハダニ

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	やや多	多	防除の目安を超えたとき 寄生葉率30～40%以上 または雌成虫1葉当たり0.5～1頭以上

(2) 予報の根拠

7月下旬の巡回調査では、発生ほ場率81.8%（平年43.9%）、寄生葉率6.5%（平年7.5%）、10葉当たり雌成虫数1.9頭（平年4.9頭）で平年に比べやや多かった（＋）。

(3) 防除対策

<防除判断>

防除の目安は、寄生葉率が30～40%以上、または雌成虫密度が1葉当たり0.5～1頭である。

<防除のポイント>

ア 現状で防除の目安を超えているほ場は少ないと考えられるが、発生ほ場率は高くなっている。定期的にはほ場を見回り、発生状況を確認する。

イ 葉裏までムラなくかかるよう十分な薬量を散布する。

ナ シ

1 黒斑病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	やや多	前年並	8月に2～3回の薬剤防除を行う。

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬の巡回調査では、発生ほ場率70.0%（平年86.0%）、短果枝の発病葉率3.5%（平年2.7%）、発病新梢率46.3%（平年32.0%）で平年に比べやや多かった。発病新梢率はほ場による差が大きかった（+）。

イ 気象予報では8月の降水量は平年並みである（±）。

(3) 防除対策

<防除判断>

新梢における発生が増加しているため、収穫前までの基幹防除を必ず実施する。

<防除のポイント>

ア 徒長枝の先端まで薬剤がかかるよう、ていねいに散布する。

イ 落下した果実は拾い集め、園外に持ち出し処分する。

ウ ポリオキシシン剤、ロブラール剤は耐性菌が出現しているため、これらの薬剤の単用は避け、銅剤と混用して使用する。また、耐性菌密度が高まるので連用は避ける。

果樹全般

1 カメムシ類（チャバネカメムシ、ツヤカメムシ、クキカメムシ）

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	やや多	多	園地への飛来を確認した時

現況は予察灯とフェロモントラップ調査による。

(2) 予報の根拠

ア 予察灯の誘殺数（県内6か所、7月1半旬～7月5半旬合計）は、494頭（平年618頭）で平年並みであった（±）。

イ フェロモントラップ（県内4か所）におけるチャバネアオカメムシの7月の誘殺数は前年より多かった（+）。（表参照）

表 6～8月のチャバネアオカメムシフェロモントラップ誘殺数

(県内4か所合計:平生町、阿東町、秋芳町、山口市)

年	平成18年	平成17年	平成16年 (多発年)	平成15年	平成14年 (多発年)
6月	603	42	2,383	80	1,368
7月	5,365	20	23,159	32	18,195
8月		3	14,968	3	10,709

(3) 防除対策

<耕種的防除>

常発園では、ネット（網目4mm以下）で園全体を覆い侵入を防ぐ。

<防除判断>

ア 無袋栽培園では園内で飛来を確認したら直ちに防除する。付近の灯火への飛来状況も参考にするとよい。

イ 断続的に飛来が続く場合が多いので、防除後7～10日を目安に園内や周辺の灯火を観察し、再度飛来を認めた場合は、追加の散布を行う。

<防除のポイント>

ア カメムシ類が園地へ飛来する夕方、または飛び去る前の早朝防除の効果が高い。

イ 有袋栽培でも果実が肥大して袋に接するようになるとカメムシによる被害が発生する場合があるので、発生状況に注意する。

【その他の病害虫】

作物名	病害虫名	予想 発生量	現況		発生ほ場率		備考
			平年比	前年比	本年 (%)	平年 (%)	
イネ	イチモンジセセリ	やや少	少	少	2.3	12.3	6月以降に移植した作型で、葉色の濃いほ場は被害を受けやすい。本年は防除の必要性は低いが、8月上旬に若齢幼虫が多ければ防除を実施する。
	ニカメイガ	平年並	平年並	少	0	0.6	鱗翅目害虫に効果のある長期持続型箱施用剤を利用している場合は追加防除は必要ない。
ダイズ	ハスモンヨトウ	平年並	平年並	少	—	—	防除の目安は、白変葉か所数が1アール当たり5か所以上である。
	吸実性カメムシ類	やや少	やや少	少	—	—	
カンキツ	そうか病	平年並	平年並	多	27.3	27.1	り病葉は見つけしだい除去する。
	チャノキアザミヤ	平年並	平年並	少	27.3	36.0	寄生虫数は平年並み
	ミカンサビダニ	やや多	やや多	少	9.1	1.5	例年8月から10月にかけて被害が増加する
ナシ	黒星病	やや多	やや多	多	10.0	1.0	

Ⅲ 病害虫・農薬情報

病害虫メモ

トビイロウンカの生態と防除

トビイロウンカはイネの重要な害虫の一つであり、8月以降に増殖するため秋ウンカとも呼ばれ、その名のとおり^{とび}鶯色（茶褐色）をした害虫です。

トビイロウンカはイネの株元に寄生し、多く発生すると水田の中に穴があいたように突然イネが枯れ込むいわゆる「坪枯れ」をおこします。この虫は通常、株元で生活しているため、ほ場をよく観察しないと「坪枯れ」がおこるまで多発生に気づきません。昨年は県内の多くのほ場で坪枯れがみられました。

トビイロウンカは国内では越冬できず、毎年、梅雨時期に南西から吹く風（下層ジェット気流）にのって大陸から東シナ海を渡って飛来します。このため、南西から吹く風（下層ジェット気流）は、飛来時期を予測する判断材料の一つとして利用されています。

飛来した成虫はイネに産卵し、通常3世代増殖します。8月上旬以降に現れる第2世代以降、短翅型の成虫が多くなると増殖しやすくなります。

トビイロウンカの防除の可否を判断する目安は、7月下旬～8月上旬では100株当たり20頭以上、8月中旬～9月上旬では株当たり5頭以上です。本年の防除時期は幼虫最盛期である8月1～14日、8月23日～9月5日頃と予想されます。

トビイロウンカの発生量や発生時期はその年やイネの作型により大きく変動します。また、長期持続型箱施用剤を施用した場合でも、気象条件や害虫の発生密度などにより効果が不安定になることがあります。近年アトマイヤー剤に対する薬剤感受性低下の事例も報告されているので注意が必要です。

トビイロウンカの被害を防ぐには今後発表される長期予報などを参考に各ほ場で十分観察を行い、発生量、防除適期を確認の上、状況に応じ的確に防除を行うことが重要です。

（参考）

本年度もトビイロウンカ発生型予測資料（長期予報）を7月20日、8月2日に発表していますが、この後8月17日頃にも発表する予定です。

（専門研究員 中川浩二）

IV 参考

1 予報の見方

(1) 病虫害発生量の基準（原則として過去10年間の発生量と比較）

ア 平年比

多	過去10年間で最も多かった年と同程度以上の発生
少	〃 で最も少なかった年と同程度以下の発生
やや多	〃 で2～3番目に多かった年と同程度の発生
やや少	〃 で2～3番目に少なかった年と同程度の発生
平年並	〃 で標準的にみられた発生（上記4項目を除くもの）

(注：過去の発生量との比較を表わすもので、被害や防除の必要性とは異なる)

イ 前年比

多	平年比の5段階評価で区分し、前年の評価より多い発生
少	〃 前年の評価より少ない発生
前年並	〃 前年の評価と同等の発生（上記2項目を除くもの）

(2) 予報根拠における発生要因の評価基準

+	発生を助長する要因
±	発生の助長及び抑制に影響の少ない要因
-	発生を抑制する要因

2 気象予報

(1) 概要

1か月気象予報（7月28日福岡管区気象台発表）

予 報	高 い (%) 多 い	平年並 (%)	低 い (%) 少 ない
気 温	40	40	20
降 水 量	30	40	30
日照時間	40	40	20

週ごとの気温傾向

予 報	高 い (%)	平年並 (%)	低 い (%)
1 週 目	40	40	20
2 週 目	40	40	20
3～4 週目	40	40	20

3 8月のテレホンサービスの内容（予定） TEL(083)927-4649

時期	内 容
上旬	8月の発生予報、イネ病虫害の発生状況と防除、ダイズ病虫害の防除、果樹カメムシ類の発生状況と防除
中旬	イネ病虫害の防除、ダイズ病虫害の防除
下旬	イネ病虫害の防除、ダイズカメムシ類の防除、果樹カメムシ類の防除